

山陽小野田市ふるさと文化遺産

高泊開作



周防灘干拓遺跡高泊開作浜五挺唐樋



高泊神社拝殿



勘場屋敷

平成29年9月
山陽小野田市教育委員会

序章 開作と干拓のまち山陽小野田

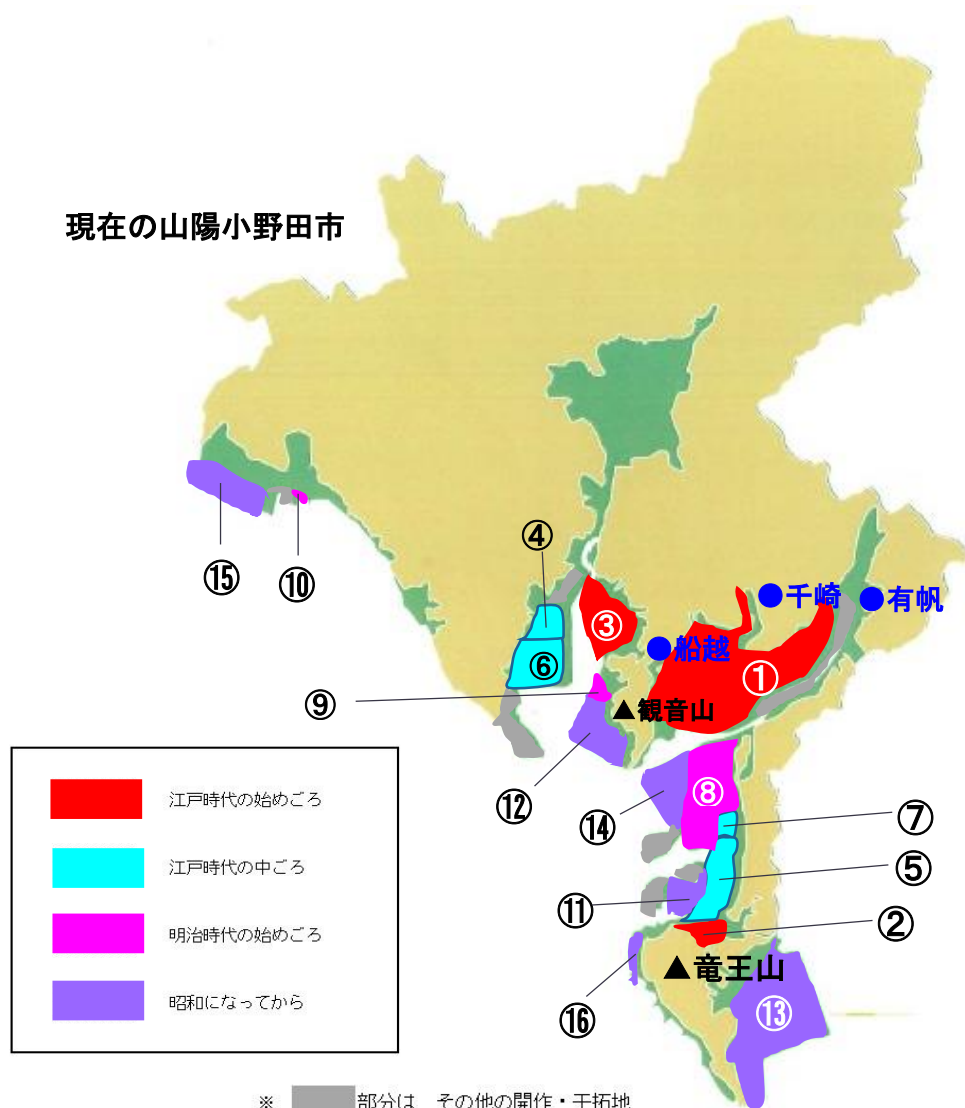


このページと次のページの地図をご覧ください。
どちらも山陽小野田市の姿です。あまりの違いに驚くのではないのでしょうか。

私たちの住むまち山陽小野田の平地の多くは、約350年前までは海でした。そこを長い年月をかけて埋め立て、広い市域が造られました。

山陽小野田市には、開作や干拓と呼ばれるところがあります。いつの時代にどこが埋め立てられて、現在の姿となったのでしょうか。

現在の山陽小野田市



山陽小野田市の主な開作・干拓地

(※年は完成年)

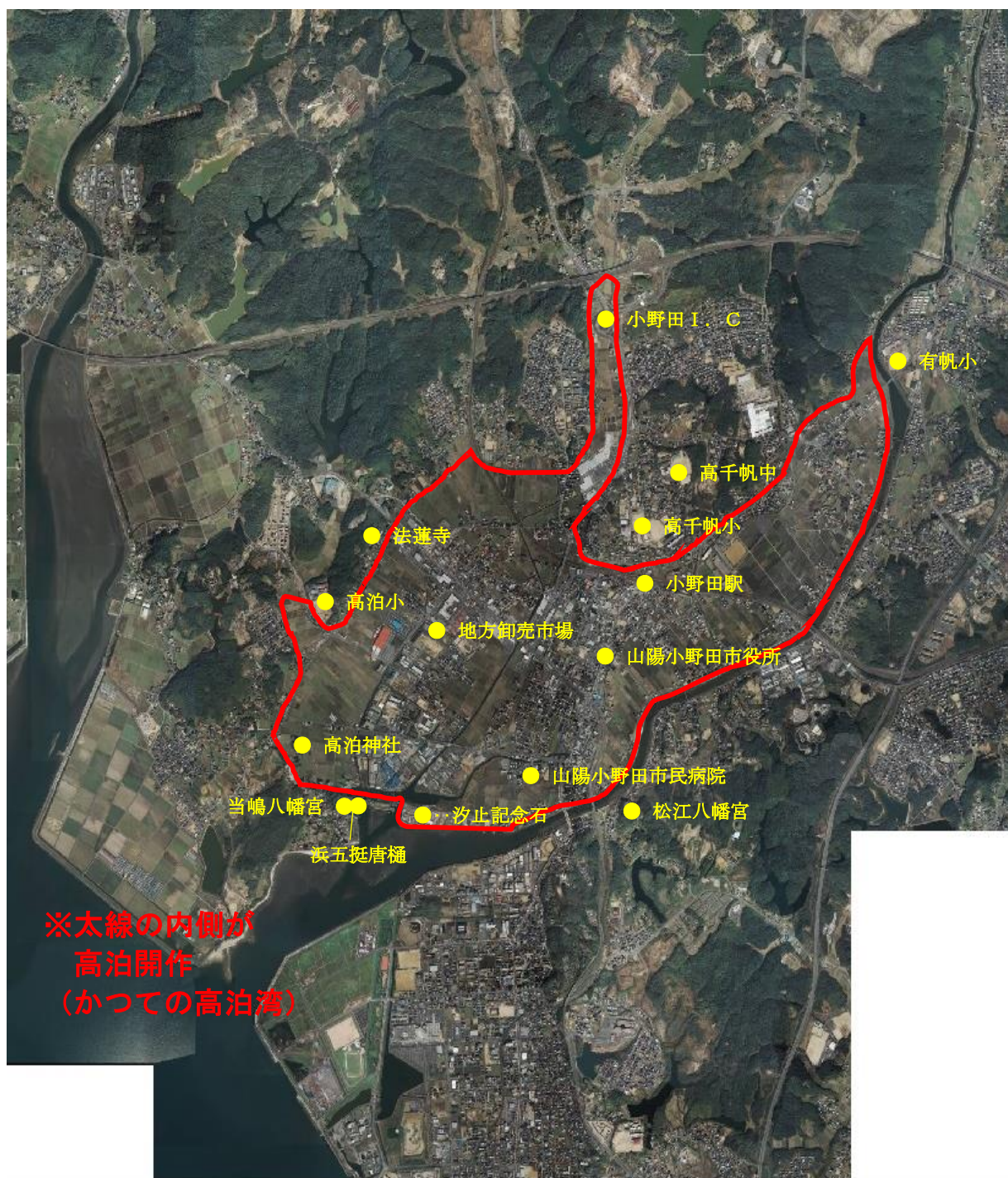
	年	開作・干拓名		年	開作・干拓名
①	1668	高泊開作	⑨	1872	黒崎開作
②	1744	西の浜開作	⑩	1888	重枝開作
③	1752	後潟開作	⑪	1929	新沖埋立地
④	1847	古開作	⑫	1951	南高泊干拓
⑤	1855	小野田古開作	⑬	1953	西沖干拓
⑥	1857	沖開作	⑭	1959	東沖干拓
⑦	1867	小野田中開作	⑮	1962	埴生干拓
⑧	1871	小野田新開作	⑯	1967	大浜埋立地

参考文献:『わたしたちの山陽小野田』(山陽小野田市教育委員会・平成19年)

第1章 「高泊開作」なければ明治維新なし！？

「開作」という言葉を聞いたことがありますか。
開作とは、山口県特有の用語で、新たに水田や塩田を開発することを言います。

現在、市役所や市民病院、小野田駅が建っている所は昔、高泊湾という海でした。この広大な海を埋め立てて陸となった所が「高泊開作」です。



慶長5年（1600）関ヶ原の戦いに敗れた西軍の総大将 毛利輝元は、徳川家康の命により石高を120万5000石から36万9411石に減らされるなどして萩に減封^{げんぽう}（領地を減らされること）され、萩藩は厳しい財政状況にありました。家臣の中にはこれを不満に思い、他家の仕官に転じた者や武士を辞めて農民になった者もいたようです。

萩藩は、この厳しい財政を立て直そうと、開作事業に力を入れます。「高泊開作」は、萩藩が手がけた開作事業の中でも最大規模のものでした。下の表でもわかるとおり、当時の中国地方で行われた開作事業の中でも大規模なもので、その後の開作事業の手本となりました。

高泊開作をはじめとする開作事業の成功により財政の安定化が図れたことが、この山口県の地から高杉晋作や木戸孝允など維新の志士たちを輩出することにつながったのではないのでしょうか。

藩を挙げての大事業でとして高泊開作を指揮したのが「楊井三之允^{やない さんのじょう}」という人物です。楊井三之允とは、どのような人物だったのでしょうか。また、どのようにして事業を成功に導いたのでしょうか。

■17世紀の中国地方（瀬戸内側）における新田開発面積ランキング■

順位	面積（町歩）	事業（箇所）名	藩名	実施年（西暦）
1位	1918.0	沖新田	岡山藩	1692年
2位	561.7	幸島新田	岡山藩	1684年
3位	400.0	厚狭郡高泊開作	萩藩	1668年
4位	329.1	倉田三新田	岡山藩	1679年
5位	250.0	厚狭郡王喜開作	萩藩	1668年

※1町歩は約1ヘクタール

※1位沖新田、2位幸島新田については、工事区域を何箇所かに区切り、それぞれに責任者を置いて実施

※参考文献 岡山藩 広瀬裕一・後藤真宏・島武男

「江戸時代の新田開発における岡山藩の特徴」

『H27農業農村工学講演会講演要旨集』2015

萩藩 高泊開作：小野田市史

王喜開作：山口市教育委員会『史跡周防灘干拓遺跡名田島新開作南蛮樋保存管理計画策定報告書』1998

第2章 高泊開作工事 ―汐止め大作戦―

今をさかのぼること約300年、中国地方の各藩は開作（新田開発）を盛んに行っていましたが、そのほとんどが瀬戸内海側でした。なぜ日本海側でなく、瀬戸内海側であったのでしょうか。

私たちが住む山口県は、東側を除く三方を海に囲まれています。県北部の須佐湾から豊北町に至る日本海に沿った海岸線一帯は、ホルンフェルスの大断層に代表されるように、変化に富んだ地形をしています。荒波で浸食され、海底が急に深くなるため、開作は困難であり、広い干潟が続く瀬戸内海側に開作の地を求めるようになったと考えられます。

高泊開作は、江戸時代初期の萩藩直営の開作としては最大の面積で、17世紀における瀬戸内に面した中国地方の新田開発（開発主体が藩の場合）の中でも大規模なものでした。



◀『高泊開作覚』（作花一男旧蔵文書）

これは、文化14年（1817）に始まる妻崎開作（宇部市）のために書かれたもので、高泊開作が約150年後の開作工事の手本になるほど成功したものだったことがわかります。

人夫として足輕衆35人、萩からかんこ船（小型の漁船）70艘、石船（碎石を運搬する船）35艘が差し出され、杭木は青野山（島根県津和野町）から千石積の船2艘分が運ばれたことが書かれています。

1. 汐止め始め

楊井三之允の代官赴任

萩藩は開作候補地の調査を各^{さいばん}宰判（代官の管轄する地域のこと。慶安3年（1650）萩藩に18の宰判が設置されていました）の代官に命じていました。

船木宰判の代官であった^{さくま}作間^{ごんえもん}権右衛門が、寛文5年（1665）に高泊湾が適地であることを藩に報告しましたが、老齢であることなどから代官の職を辞し、代わって46歳の楊井三之允が代官に任命され、高泊湾の開作、堤防の築造と汐止め樋門の建設に着手しました。

楊井三之允は、有帆川の高泊湾内の水の流れを知るため、梅雨期などの増水時に現地に行き、有帆村片山の天神山に登って濁流の流れる方向を調べました。その流れに逆らわないよう堤防を東に寄せて築き、有帆川の水を須恵半島の岸沿いに流す方法を考案しました。

準備に2年をかけた楊井三之允は、寛文8年（1668）2月28日、鍬初め式を高泊湾の龍王島で行いました。当嶋八幡宮・松江八幡宮でも同様の祈願をしました。



▲ 開作工事の風景（ジオラマ）
山陽小野田市歴史民俗資料館



▲ 楊井三之允の遺品



▲ たかとまりごかいさく しんでんき
高泊御開作新田記（部分）（高泊神社蔵）

高泊開作の造成記録で、楊井三之允が厳島龍王社（今の高泊神社）を建立した時に、正副2巻を奉納しました。寛文12年（1672）の奥書がある古文書で、高泊神社の縁起でもあります。

正本は昭和59年（1984）市の指定文化財となりました。副本は、歴史民俗資料館に寄託されています。

二度の災害にも立ち向かい・・・

工事は順調に進んでいきましたが、6月12日に豪雨により堤防の一部が決壊しました。

楊井三之允は、この修理を慎重に進め11月下旬に終わりましたが、直後の11月28日夜に、大雨・台風・大波により、またしても堤防の一部が決壊し、樋門まで流されてしまいました。

これには落胆し、責任を取ろうと藩に報告した楊井三之允でしたが、藩は改めて工夫をこらし勇気を百倍にして工事を続けるよう激励しました。

楊井三之允は、気を取り直し、崩れたあとを堅固に修復し、有帆川河口の角石岩崎寺の地先から南へ2,040間（3,709m）、松江八幡宮地先から西の当嶋八幡宮下まで600間（1,090m）の堤防と現在の横土手に汐止め樋門を完成させました。

2. 汐止め完成後



◀ 汐止記念石

大正6年（1917）5月11日高泊開作250年祭で建立したものです。

寛文8年（1668）の堤防築造時には、ここに排水樋門が造られていましたが、三挺樋（現在の^{はまごちよう からひ}浜五挺唐樋）が完成したことにより埋められました。

寛文8年（1668）の工事では、今の横土手に汐止めの樋門が造られました。しかし、ここは潮浪をまともに受ける場所であるため別の場所に造ることを考えました。それは当嶋八幡宮下の岩盤でした。

樋門は2か所造られ、1つは東側で横土手との間に、もう1つは南側に当嶋八幡宮の南参道下にある岩盤を切り抜いて設けました。『^{きりぬき からひ}切貫唐樋』と呼ばれる堅固な排水用樋門です。

これらの樋門は汐止め完成から2～3年後に造られたものと言われています。

唐樋の門戸は「招き戸」と呼ばれるものがつけられていて、満ち潮になると招き戸は自然に閉まり、干潮になると遊水地の溜まり水の圧力で自然に開き、内側の溜まり水を外海に排出する仕組みとなっていました。

また、非常時には招き戸を滑車（ロクロ）で巻き上げられるよう設計されていました。

東側の樋門は、完成当時には招き戸が3枚あったので『三挺樋』と呼ばれていましたが、排水が難しく樋門近くの田は水に浸かることが多かったため、安政4年（1857）に2挺切り広げられ『五挺樋』となりました。

南側の樋門『二挺樋』は、太平洋戦争中の昭和20年（1945）7月、米軍の空襲によりに埋没したため、どこにあったのか分からないままです。

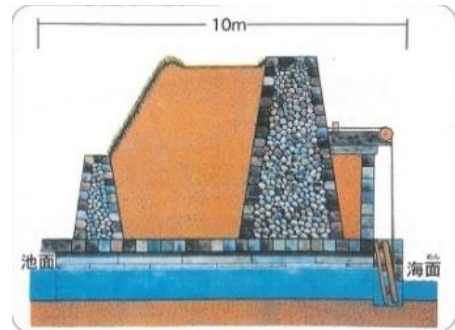
その後、横土手には太平洋戦争中に高千帆排水機場、昭和63年（1988）3月に西高泊排水機場が造られました。五挺樋は平成元年（1989）に樋門コンクリートが詰められてその役目を終えました。

この五挺樋は当時の優れた土木技術を伝えるとても貴重なもので、「高泊開作浜五挺唐樋」の名称で平成8年（1996）3月28日、山口市の「名田島新開作南蛮樋」と共に「周防灘干拓遺跡」として国指定史跡となりました。



▲ 国指定史跡
周防灘干拓遺跡高泊開作浜五挺唐樋

五挺唐樋のしくみ



『はっけん！山陽小野田』
（山陽小野田市教育委員会・平成27年）
より引用

第3章 終わらないチャレンジ

1. 田を造る

海を干拓して田を造るためには、土が必要でした。有帆杵築には「土取^{つっとり}」という地名が残っており、一説によると、そこから土を取って運んだのではないかとされています。

土で埋めた所には塩分が残っていたため、それを取り除く必要がありました。

東日本大震災で津波により浸水した農地に綿花を栽培するプロジェクトが行われていることを知っていますか。

綿花は対塩性が高く、綿花を栽培することで土壌の塩分を取り除くことができます。瀬戸内の新田では、綿花の栽培を行い、綿織物が盛んになった地域があります。岡山のデニム、愛媛県今治のタオルが有名です。

高泊開作でも同様に綿花を植えていたのでしょうか。

2. 水を得る

高泊開作を広大な水田にするためには、水を供給する必要がありました。

楊井三之允は、開作の東半分（後の東高泊）には有帆川の水を、西半分（後の西高泊）にはため池から水を引くことを考えました。

江汐湖

「えっ？江汐公園の江汐湖が関係あるの？」って思う方もいるかもしれません。

楊井三之允は寛文12年（1672）、千崎と高畑にある山峡をふさぎ止めて約100メートルの堤防を築き、面積23ヘクタール（おのだサンパークの敷地 約2.5個分）の水面をたたえるため池を完成させました。それが現在の江汐湖です。

江汐湖の水は川となり西高泊の水田を潤し、最終的に浜五挺唐樋から海に流れ出ていました。

開作が完成した後も、高泊開作の灌漑用水源として、江汐湖だけでなく西河内、六斗、瀬戸、小松尾、河内、高尾、小松尾新、河内、河原田、堀田など次々にため池を築きました。

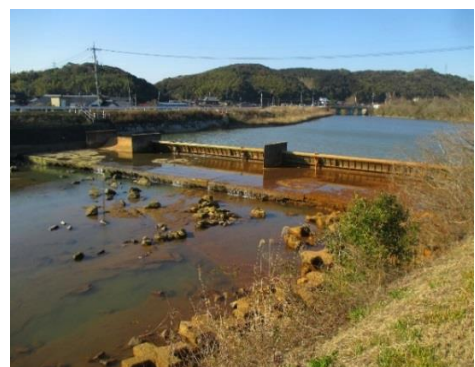
現在、江汐湖の周辺は、豊かな植生と多くの野鳥や昆虫に恵まれた公園となっています。春には5万本のコバノミツバツツジを誇り、あじさい園やばら園などもあり、四季折々の花が見られる憩いの場として市民に親しまれています。



▲江汐湖（冒険の橋から撮影）

石井手堰

有帆川に井堰（水を他所へ引いたり流量を調節したりするため川水をせき止める所）を築き、川土手に取水口を2か所設けて水路を開きました。井堰は石井手と呼ばれ、現在も地名として残っています。



▲石井手堰

数々の工事を終えて高泊開作の全ての事業が完成したのは、工事開始からから5年ほど経った寛文13年（1673）頃と推察されます。慶長15年（1610）に家の数20戸、石高200石であった高泊は、開作により400町歩（約397ヘクタール）の水田が開かれ、享保19年（1734）には370戸、4,470石とへと発展しました。

3. むらをつくる

楊井三之允は、船木代官を元禄元年（1688）まで23年間務めました。開作工事の他にも、高泊神社の建立や法蓮寺の吉部村からの移転などにも取り組み、開作地にむらの基礎を造りました。

高泊神社

高泊湾には、楊井三之允が工事の時に祈願したと言われる、龍王島という岩の島がありました。

工事中、2度目の堤防決壊に見舞われ、再び祈願に訪れた楊井三之允は、工事が順調に終わったら必ず龍王島に神社を建立することを誓い、工事を再開しました。

そして、無事に汐止めを完成させ、延宝元年（1673）建立にあたりました。

建立当時の名称は巖島龍王社でしたが、明治3年（1870）に二柱神社、大正6年（1917）に現在の高泊神社になりました。

ここには高泊開作開墾碑（明治5年）や楊井三之允の頌徳碑（大正13年）など、高泊開作にまつわるものが数多く残っています。

社殿の木組みや資材の輸送、神具は全て藩のお金で揃えられ、神紋（神社の家紋）には毛利家家紋である一文字三星^{いちもんじにみつぼし}の使用が許されました。



▲高泊神社拝殿



▲龍王島
（波で削られた跡があります）



▲一文字三星の神紋が使われているのがわかります

法蓮寺

吉部村犬ヶ迫（現在の宇部市）にあった法蓮寺は、汐止めから10年目の延宝7年（1679）に現在地に移されました。楊井三之允が、開作地に移り住んだ人々の定住を願い移転させたと言われています。

高泊開作を一望できる烏帽子岩の丘上に建っており、地元住民のお寺として、また藩の役人の休憩所などとして使われました。

本堂の軒先にかかっている梵鐘^{ぼんしやう}は元禄3年（1690）に鑄造されたもので、時刻を知らせる他、開作の堤防決壊など急を知らせる合図として鳴らされていました。

鐘音は3キロメートル先まで高泊開作の全域に届いていたと言われています。後に行われた小野田方面の開作工事においても、その日の工事開始の合図になっていたと言われています。



▲法蓮寺



▲市指定文化財 法蓮寺梵鐘

第4章 高泊ゆかりの家

江戸時代、村落の長は「庄屋」と呼ばれ、「^{くろがしら}畔頭」、「証人百姓」と呼ばれる役人とともに、村の自治に携わりました。高泊開作地で庄屋を務めた家々を見ていきます。

さっか 目（作花）家

作花家は、一説によると、戦国時代に豊後の国を離れ西高泊の観音山へ移り住み、武士を辞めて百姓になったと言われています。

高泊開作の工事が始まった寛文8年（1668）以降、歴代の当主は、数人を除いて代々「権右衛門」と名乗り、西高泊村の庄屋を務めました。

七代目権右衛門信継の代まで「目」姓を名乗っていましたが、享保11年（1726）に藩命により「作花」に改姓したと言われています。

現在、浜に残っている勘場屋敷は、目家の住居でした。これは、高泊開作事業の際に、庄屋を務めていた当主が大変尽力したので、2石とこの屋敷を給わったと言われています。



◀ 観音山城跡

郷にある八坂神社の裏口に石垣があります。
この近辺には「城」、「城出」、「館」などの地名があります。
どのくらいの大きさのお城が建っていたのでしょうか。

中屋家

作花家七代権右衛門信継の末子権十郎を祖とする家で、「中屋」は屋号で本名はあくまで「作花」でした。

この家は、初代権十郎の後、二代目与三兵衛、三代目権十郎、四代目権十郎、五代目清右衛門と、明治時代まで続きました。三代目権十郎の時代に大庄屋格を拝命し、息子の亀之助（後の四代目権十郎）の時代には永代庄屋格を命じられ、帯刀を許されました。

先述の作花家と中屋家の作花一門が、西高泊村の発展に大きく貢献したことは間違いありません。

かんば やしき 勘場屋敷

浜にある勘場屋敷は、楊井三之允や工事に携わった役人が起居したと伝わる建物で高泊開作造成時の寛文8年（1668）に建てられたと言われています。

『勘場』とは萩藩の各宰判に置かれていた代官所のことをいいますが、ここは高泊開作造成時に設置された臨時の代官所でした。

建物の中には他の部屋より約9センチメートル高く作られた「上段の間」という8畳の部屋があり、ここで楊井三之允が起居していたと言われています。

勘場屋敷 ▶

昭和20年（1945）に米軍の空襲により一部が壊れたため改造したり、防火のため茅葺の屋根を着色亜鉛板で覆ったりしてありますが、建物・間取りはほぼ当時のままで300年以上風雪に耐えてきました。往事の面影がよく残っている市内で最古級の民家です。



◀ 上段の間に面した庭

江戸時代前期の平庭式枯山水庭園で、『山口県の庭園』でも取り上げられていました。楊井三之允は上段の間から、この庭を眺めていたことでしょう。

中村家

中村家は、高泊開作の灌漑用水の確保のために築いた江汐湖の築堤にあたった庄屋です。

もともとは高畑に住んでいましたが、江汐湖の築堤の際、水田であった土地の提供と引き換えに東高泊の現在地を拝領して移り住みました。

幕末から明治にかけて石炭制道方、石炭方大頭取助役などの役に就き、屋号を鶴屋と称し、石炭問屋も営んでいました。



◀ 中村家住宅

現在の建物は、明治20年頃に改築されたもので、瓦葺入母屋造、一部2階建てです。

下座敷と上座敷がL型に配置されて庭を囲んでいます。

また、仏壇前の床は一段高くなっており、庭は京都の庭師を呼んで造らせたと言われています。

第5章 高泊の近現代

1. 高泊村から高千帆村・高千帆町へ

高泊開作事業によって生まれた東高泊村・西高泊村は、明治22年（1889）、千崎村・有帆村・高畑村と合併し、それぞれの文字を組み合わせた「高千帆村」となりました。この時、開作工事前に海と陸地であった所が、初めて1つの行政区域になりました。

この年の戸数は1,043戸、人口は5,162人と記録にあります。

高千帆村は、その後、小野田駅の開設を契機に、商業地として発展していきます。

昭和13年（1931）4月1日に町制が施行され、「高千帆町」となり、昭和15年（1940）11月3日に高千帆町と小野田町が合併し、「小野田市」となりました。

記録によると、合併当時の高千帆町の戸数は3,033戸、人口は13,540人で、高千帆町となった明治22年と比べると、戸数は約3倍、人口は約2.5倍に増加しており、明治中頃から昭和初期にかけて大きく発展したことがよくわかります。



▲ 高千帆村役場

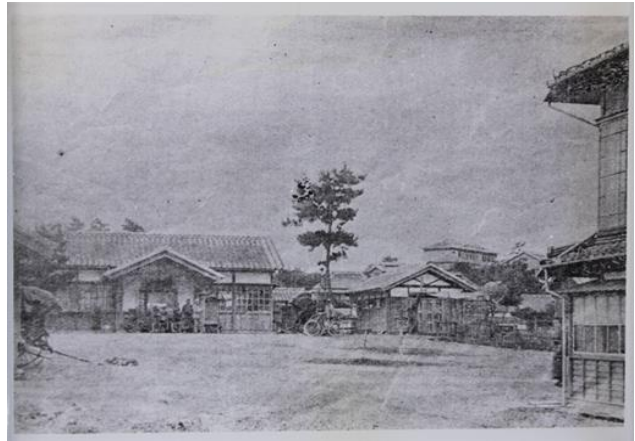
2. 小野田駅の開設

現在の小野田駅は、明治33年（1900）12月3日、私鉄の山陽鉄道の駅として開設されたことがその始まりで、高泊開作地にあります。

駅開設直後の時刻表によると、小野田駅には1日に上り6本、下り6本の汽車が停まっていた。

京都駅まで、速い列車でも16時間程度かかっていたようですが、街道を何日もかけて歩いていた時代とは比べものにならないほど速くなりました。

駅の開設を契機に、駅を中心とした道路が整備され始め、駅前には旅館や貸家が建ち並び、小野田駅前町として栄えました。



▲開設当時の小野田駅

3. 市役所移転

昭和15年（1940）、高千帆町と小野田町が合併してできた小野田市。最初の市役所は旧小野田町に置かれました（現在の公園通り交差点の南西側）。

市役所移転については、合併の際に両町が提出した「小野田市設置の件具申書」に「市役所の新庁舎建設の際には高千帆町地区内」とする約束が記されていたようですが、反対運動も起こり、スムーズに事が進まなかったようです。

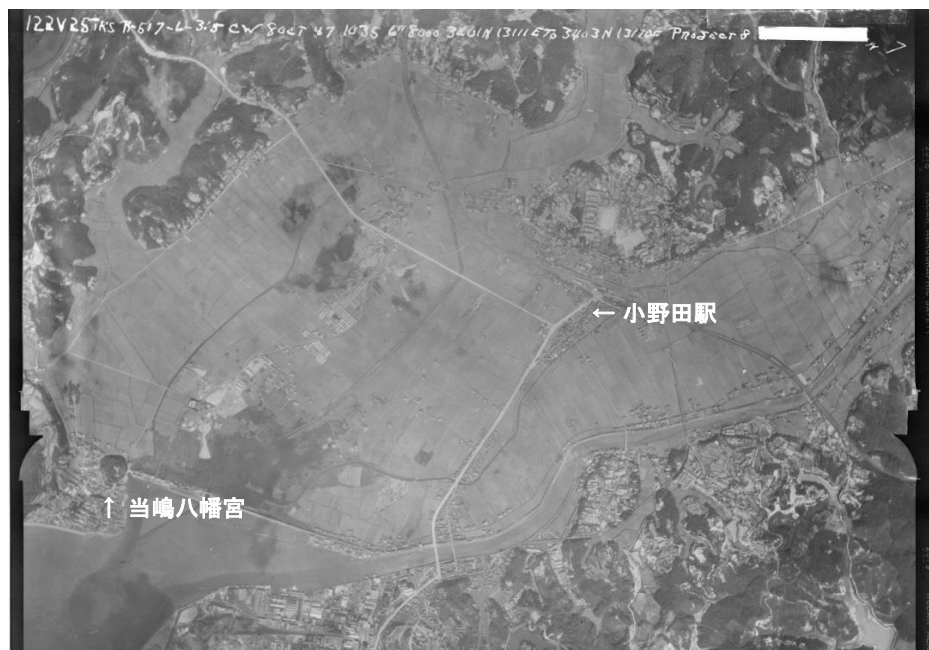
昭和35年（1960）1月3日の市議会でようやく、大字東高泊1810番地（現在の市役所の位置）に移すという「小野田市役所位置に関する条例」が提出され、可決されました。

昭和38年（1963）3月1日、市役所の移転作業が始まり、18日から新庁舎で執務が始まりました。

4 現在の高泊一空から見た高泊一

高泊開作地は、鉄道の開通や商工業の発展に伴い、大きく変貌してきました。

今日では、市役所、警察署、市民病院だけでなく住宅、工場、ショッピングセンターなども建ち並んでいます。下の写真で比較すると、その違いがよくわかります。



◀ 昭和22年（1947）の
高泊開作



▲ 平成25年（2013）の高泊開作

（上下ともに 国土地理院ウェブサイトより）

コラム① 貝が出たよ！！

神田の交差点から南（高泊小学校方面）へ延びた市道高泊千崎線の拡張工事を行っていたとき、道路脇の田を掘り返した所から貝殻が多数出てきました。このことから、田の下がその昔海だったことがわかります。



▲工事の様子



▲発掘された貝

コラム② 殿様もやってきた高泊

勘場屋敷に残された古文書には、萩藩第9代藩主の毛利^{もうり}齊房^{なりふさ}や第10代の毛利^{もうり}齊熙^{なりひろ}による「御下り^{おくだり}」の史料があります。「御下り」とは、藩主が村々へ出向き、その様子を見ることを言い、両殿様は、道中、高泊村に昼の休憩として立ち寄っています。船木宰判の大庄屋であった作花権十郎（中屋家）は、その責任者になっていたようで、「御下り」の際には、殿様に同行した「御供中」にも酒や食事を用意しました。

また、殿様用に自宅の便所の新調や風呂の天井の張替えなども行いました。殿様がやって来る数日前には、役人による検査が行われ、不備があると、「今日明日中」にやり直すよう指示されました。

権十郎宅に加え、作花権右衛門宅（現在の勘場屋敷）も、御供の休憩場所に指定されていたことから、作花一門を中心に殿様などの接待が行われたと推測されます。



▲勘場屋敷（内部）

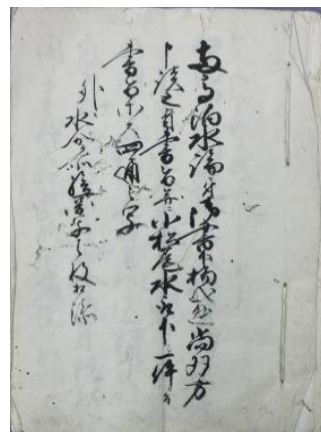
コラム③ 水をめぐる争い

文化6年（1809）以降、東高泊村と西高泊村の間で、田に引く水の量を巡って絶えず紛争が起こっていました（これを水論と言います。）。これを解決するため、文化8年（1811）7月に協議をしたという記録が「東西両高泊^{すいろんとりおさめ}水論取納」に残っています。

これによると、茅場^{かやば}（現在の千崎）という所に井手^{いで}（田に水を引き入れるため川の流れをせき止めてある所）を設け、水盛り盤を置いて、配分する水を量ったと言われています。

水の配分について細部にわたり申し合わせをしたその協議は東西両高泊の重大事であったため、船木・吉田の両代官が立会い公正を期しました。

この方針の基に交換され東西両高泊の覚書には、両高泊村の百姓や庄屋の連署に、船木・吉田の両代官の奥書署名捺印があります。



▲東西両高泊水論取納



◀^{かやばぶんすいのえず}茅場分水之絵図

東西両高泊水論取納により設けられた水盛り盤の詳細な設計図です。



▲現在の茅場分水（下流から）



▲現在の茅場分水（上流から）

高泊開作をもっと知ろう！

歴史民俗資料館

昭和57年（1982）に小野田セメントから創業100周年記念の寄付を受けて建設されました。

今回取り上げていない高泊開作に関する資料を展示しています。

※高泊開作に関する資料を展示していない期間もありますので、来館前にお問い合わせください。

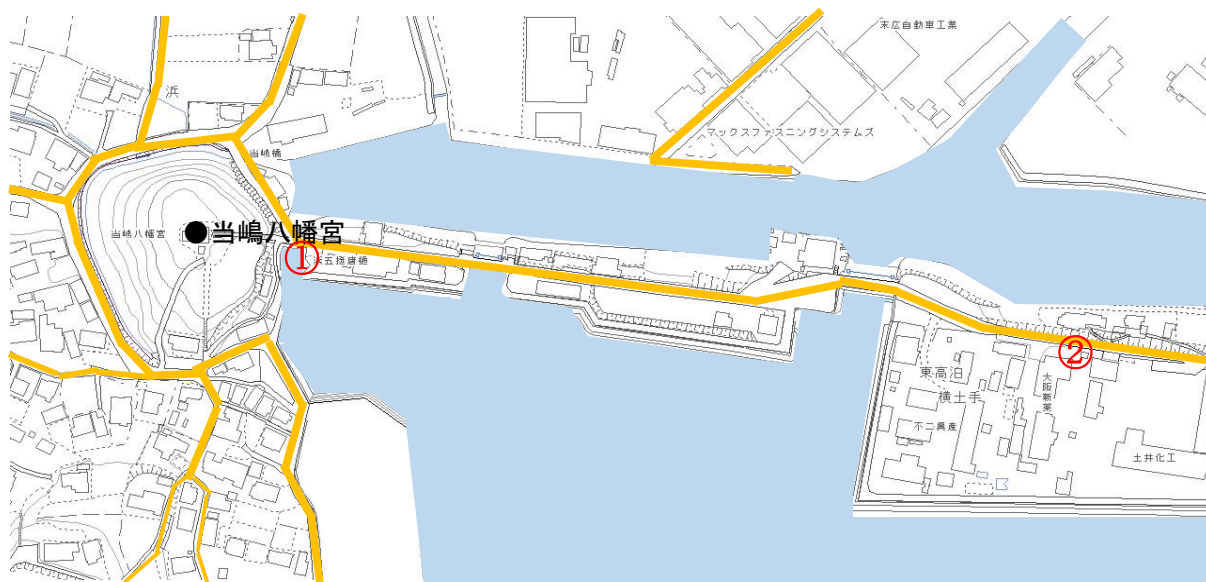
電話：（０８３６）８３－５６００



史跡マップ



浜五挺唐樋周辺



①浜五挺唐樋 ②汐止記念石

高泊神社・勘場屋敷周辺



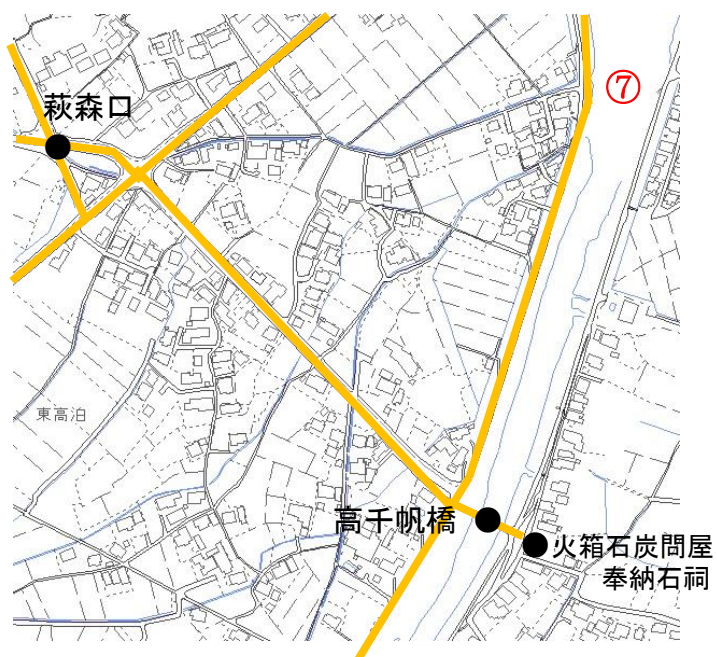
③勘場屋敷 ④高泊神社 ⑤観音山城跡

法蓮寺周辺



⑥法蓮寺

石井手堰周辺



⑦石井手堰

主要参考文献

●著書・論文・報告書等

小川國治編『山口県の歴史』山川出版社、1998年
小川國治編『長州と萩街道』吉川弘文館、2001年
小野田市『夢紡ぐー小野田市65年のあゆみ』2005年
小野田市教育委員会『ふるさと小野田』1972年
小野田市教育委員会『勘場屋敷現状調査報告書』2005年
小野田市歴史民俗資料館『わが町の鉄道史 小野田線を歩く』2003年
河本寅雄『ふるさと散策ー小野田編』2007年
高橋政清編『ふるさとの思い出写真集 明治大正昭和 小野田』国書刊行会、1979年
田中誠二『萩藩財政史の研究』塙書房、2013年
田中助一「防長の石工」（『山口県地方史研究36』1976年）
田中助一「防長の石工ー作者名のある防長の石造物ー」（『山口県の文化8』1978年）
堀哲三郎編『高杉晋作全集 下』新人物往来社、1974年
光成準治『毛利輝元』ミネルヴァ書房、2016年
山口県教育委員会『山口県未指定文化財報告書8 山口県の庭園』1994年
山口県教育委員会文化課『史跡周防干拓遺跡名田島新開作南蛮樋保存管理計画策定報告書』1998年

●自治体史

『厚狭郡史 復刻版』マツノ書店、1986年
『小野田市史 史料編上』1986年
『小野田市史 民俗と文化財』1987年
『小野田市史 史料編下』1988年
『小野田市史 通史編』1990年
『山口県史 史料編近代4』2003年
『山口県史 史料編近世2』2005年
『山口県史 史料編近世4』2008年

他、多数の文献を参考にしました。